



創立までの経緯

～104年前の出来事～

第21代校長 塩原 正美

2学期がスタートしました。9月26日（火）から29日（金）まで3泊4日で2年修学旅行（青森・函館）が実施されます。また、10月21日（土）、22日（日）には商工祭（文化祭）が実施されます。2日間とも一般公開しますので是非足をお運びください。まだまだ暑い日が続きますので熱中症等にはご注意ください。

今回のコラムでは、大正9年本校の創立の経緯についてご紹介します。昭和62年に発行された、冊子「名教自然」から抜粋してお伝えします。

大正8年、横浜の豪商、安部幸兵衛氏は当時の金で百万円を公共事業に役立てるため県に寄付したい、ということを行い残して亡くなりました。その言葉を受けて県が用途を一般募集したところ、図書館、病院あるいは育英資金にというふうにより、使用申込が数十件にも及びました。本校初代校長、鈴木達治先生（号：煙洲）はその頃、横浜高等工業学校（現：横浜国立大学工学部）の創立に関係していたことから、その資金で商業と工業を合わせた中等学校を設立して、横浜高等工業学校の附属、つまり文部省直轄の学校にしたいと考え、この件を申し出て運動をしたのです。この申し出の裏には、商業系と工業系との間でお互いに知識の交流をはかり、理解と親しみを深め、さらに商工協力して、工業技術的な面と経営・経済的な面とに役立つ人材を養成する目的があったのです。ところが、文部省直轄か県立かで意見が分かれ、設立の話はそのままになっていました。ある日、煙洲先生は桜木町駅前の大江橋の上で見知らぬ人から、県下に新しく商工学校設立されることについての喜びの声を聞かされました。そこで、文部省直轄か県立かのことで争っているのは大局から見て筋が立たないと考え、ともあれ、県立としての設立を引き受けることにしたのです。校舎は、当時開校の準備が整っていた高等工業の余裕のある部分を使い、大正9年、同時開校にこぎつけました。ところが、開校4年目を迎えようとした時に、4年生が生まれるということで問題が生じたのです。それは、商工実習が3年制の乙種※1であるか5年制の甲種※2であるかという点でした。県としては乙種と考えていましたが、商工側はあくまでも甲種のつもりでいたのです。この食い違いの結果、一時は廃校措置までとられそうになったため、煙洲先生は、私立学校にしてでも経営するというふうにも考えるまでになりました。結局後に第2代校長となられた山本政人先生（煙洲先生の広島高等師範学校時代の教え子）の働きもあって、ようやく甲種5年制にこぎつけることができました。

※1 乙種・・・高等小学校（今の中学校に相当）卒業後、3年の実業教育を受けるコース

※2 甲種・・・小学校卒業後、5年間実業教育を受けるコース

先月のコラムでお知らせした、この写真の2本の木は、正門入ってすぐ横にあります。創立60周年記念（1980年・昭和55年）のとき、商業の木として楠、工業の木として椎を植樹したものです。楠は途中から枝が1本枝分かれし、商業科と情報処理科を表しています。椎は根元から3本に分かれていて、機械科、電気科、工業化学科を表しています。

